



京都府立医科大学 男女共同参画推進センター NEWSLETTER



文部科学省 科学技術人材育成費補助金 女性研究者研究活動支援事業（女性研究者支援モデル育成）—しなやか女性医学研究者支援みやこモデル—

京都府立医科大学病児保育室開室1周年記念フォーラム 「医療者の子育て支援～より良い方向性を目指して～」



吉川 敏一 京都府立医科大学 学長

今日は1周年記念フォーラムという機会を持ってたことを非常にうれしく思っています。

本学の一つの方向性として、特に子育て支援を標榜しておりますので、まず第一歩に病児保育室「こがも」がこの1年間の実績を踏まえ、今後、年々すばらしいものになるように変えていきたいと考えています。本学は、今年で140周年を迎えます。これからは臨床は当然のことながら、研究にも力を入れていく必要があります。本学も女性医師が非常に増えてきており、女性医師・研究者への支援と男性医師・研究者への支援も併せて取り組んでいきたいと考えています。

今日はその意味では山崎先生をはじめとしたお話、「医療者の子育て支援等の取組」を参考にさせていただき、本学の今後の取り組みに活かしたいと思っています。



三木 恒治 京都府立医科大学附属病院 病院長

病児保育室「こがも」は、平成22年度文部科学省の女性研究者支援事業の一環として開室されました。

女性医師や看護師の子どもさんなどをどのようにケアしていき、職場復帰していただくかということは病院にとっても非常に大事なことでありと考えています。子育てをしながら職場に復帰するというのはストレスもかかり、時間的な制約も受けます。その中で少しでも役に立てるということ、このプロジェクトが進んでいます。本学は女性教員が少ないので、支援事業を通してより働きやすい環境を作っていきたいと思えます。

本日は、山崎先生に勤務環境の改善についてのお話や病児保育についてのパネルディスカッションを通して、今後どのように展開していけるのか、支援として他にやっていけることはないかを我々も一緒に考えたいと思えます。

記念講演「女性医師の勤務環境改善に取り組んで」 山崎 麻美 愛仁会 高槻病院 副院長



略歴

昭和53年 京都府立医科大学卒業
平成 8年 ケース・ウエスタン・リザーブ大学(米国)留学
～ 9年
平成19年 国立病院機構大阪医療センター副院長
大阪大学医学部脳神経外科臨床教授
平成24年 愛仁会高槻病院副院長
小児脳神経センター長

はじめに—わたしのこと—

18歳まで淡路島で育ち、早く島を出たいと思っていました。子どもを産んでから変わりましたが、繊細で学校嫌いな子どもでした。あこがれの医学部に入学できて楽しい学生時代のはずですが、なかなか苦難の学生時代を過ごし、紆余曲折を経ながらトボトボとやってきたというのが実情です。学生時代に結婚し、小児科医として研修を始めたのがかなり遅れて27歳の時でした。実はその頃から脳神経外科をやりたいと思っていたのですが、とんでもないというような時代でした。

小児脳神経外科医に

しかし、30歳で第一子を出産し、ある縁で大阪大学の脳外科

に変わることになりました。2人目出産の頃、叔母が家事を手伝ってくれるようになり、大阪大学の脳神経外科のローテーションに入ることが出来、専門医も取ることが出来、それから入局という形で順調に進んできています。

そこから先天性水頭症の分子遺伝子学の研究をはじめ、45歳の時、中学生の下の子だけを連れてアメリカに別居留学をしました。これが私には大きな転機になりました。留学先のボスに「子どもを連れて行ってもいいですか」と聞くと「何が問題なのだ」といわれ、アメリカでは女性研究者が家族と離れ研究しているとか、研究室に子どもを連れてくるのは当たり前のことだったので、非常にいいなと思い、私自身もやっと開放された気持ちになったのを覚えています。

それまで非常に苦勞をしてきたので、自分で勝手に「人は苦勞が多いほど豊かになれる。何をやってもうまくいかない時はじっと我慢して力を蓄えるとき。」とあっていて、これが大きな力になりました。

なぜ小児脳神経外科医を選んだのか

小児脳神経外科は、大人の脳神経外科と全く違い、子どもを対象にするので、あらゆる疾患を対象にします。先天性の病気などが多いので、障害を持ったお子さんとそのお母さんの相手に時間

プログラム

平成24年7月7日(土) 14～16時 京都府立医科大学基礎医学学舎 第2講義室

総司会 伊東 恭子 京都府立医科大学 分子病態病理学 准教授
開会挨拶 吉川 敏一 京都府立医科大学 学長
三木 恒治 京都府立医科大学 附属病院 病院長

●記念講演 山崎 麻美 愛仁会高槻病院 副院長
「女性医師の勤務環境改善に取り組んで」

●京都府立医科大学病児保育室「こがも」開室1周年報告
三沢あき子 京都府立医科大学 小児科学教室 講師

●パネルディスカッション

「医療者とその子ども達にとっての病児保育」

山崎 麻美 愛仁会高槻病院 副院長
横田 昇平 京都府健康福祉部 医療専門監(京都府地域医療支援センター)
上野たまき 綾部市立病院 小児科 部長
福本 暁子 京都府立医科大学 眼科学教室 大学院生
藤井あゆみ 京都府立医科大学 看護部 看護師

開会挨拶 矢部 千尋 京都府立医科大学 薬理学教室 教授・男女共同参画推進センター長

を費やされるので、難しい手術をと思ってきた人には苦手分野になってしまうのですが、私は小児科をやってきて、また母親としての特性も生かせるので、本当にいいなと思って30年余りやってきました。自分の居場所を得たというのが実感です。

女性医師勤務環境改善プロジェクトの発足

脳神経外科部長の時、麻酔科の医者が2人続けて産休に入るとい状況になり、臨時の場合は自科で麻酔をということになり、そのこと自体大変だったのですが、女性医師が肩身の狭い思いをして産休をとるのは、私が医師になった時代から何も変わっていないと思い、「女性医師の勤務環境改善プロジェクト」を発足させ、次のように取り組みました。

① 環境改善

当直室の整備、院内売店の充実や女性医師宿舍の防犯上の整備等

② 復職支援

シンポジウムを開催し、研修を7名が利用し、10年ブランクの医師が呼吸器専門病院に復帰、9年間休職の医師が非常勤採用や、精神科外来に復帰、皮膚科で育児短時間で復帰できた。

③ 育児支援

昭和49年から看護婦対策として院内保育があり、病児保育、24時間保育（看護婦の利用がほとんど）、保育時間の延長、土日祝の預かりなどの要望が出て、ひとつずつやってきた。中でも利用が多いのは病児保育であった。



④ 就労形態の柔軟化

国立病院機構で育児短時間勤務制度が発足し、少子化対策が求められる中、長期間にわたり育児と仕事の両立が可能となるよう、育児のための短時間労働勤務制度が導入された。また、男性医師も含め、全医師に対して、変則勤務の導入を同時に行った。

勤務軽減が先かという議論

取組を始める時に、夜や病気の時ぐらい母親と一緒にいてあげたらいいとか、勤務軽減を先にすべきではという意見や経費の問題も取り上げられた。私の考えとしては、脳外科でやってきて、当直のデューティとかはやらないとやっぱり一人前の脳外科医になれないし、夜の救急に対応できるような医者になりたいと思うので、その辺はやりたいと思います。

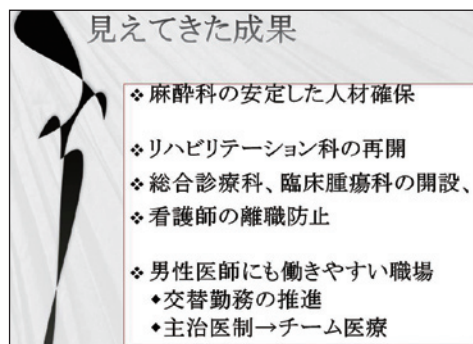
また、当直は免除、という考え方もありますが、必ずしもそうではなくて、同じようにキャリアを積んでいくためには、やはりそれができる体制を保証する必要があるのではないかと私は思っています。ただ、過剰労働になるというのはたしかで、育児短時間制度や、変則勤務、交代勤務、夜に働けば次の日は休めるということを全員に適用していくことも必要になると思います。

6年間の取組で何が変わったか

効果として、常勤の女性医師数の変化を見ると平成17年11月から平成23年6月の間で42名中16%（15人）～81名中25%（38

人）に増加しています。

また、麻酔科の安定した人材確保、閉鎖・併任していた診療科の再開や、新しい診療科リハビリテーション科の開設、がんサポートチームの発足、看護師の離職防止にもつながりました。また、交代勤務の促進、主治医制からチーム医療の導入が進み、男性医師にも働きやすい職場となりました。



見えてきた問題点

取り組みの中で見えてきた問題が、①管理者の意識、②経営者の意識、③女性医師の意識でした。①管理者とは人事権を握る人ですが、交替勤務や変則勤務の導入に抵抗感があり、女性の管理職は少なく、女性のリーダーシップに不信感もありました。また、②経営者の意識として、医師を多く雇い経営が成り立つのか、夜間保育に経費がかかるという議論がありましたが、実際は経常収支や医療収支は上がってきています。そして、③女性医師の意識の中に、私は一抹の問題点を感じています。愛知県のアンケート調査で結婚相手から仕事を辞めるようにいわれたら仕事を辞めるとい人が54.5%であったことに、私は驚いたのですが、女性医師の仕事や子育てに対する考えは年齢、環境、自らの状況などで異なるのですが、一方では医師一人が育っていく過程で多大なお金と時間がかけていて、それだけ社会の中でのエリートであって、それに応える責任のある職業という認識がもう少し、女性医師の中に必要だと思えます。

最後に「子育て育児より子育て育児」

「子育て育児より子育て育児」というのは、聖マリア病院の橋本武夫先生にいただいた言葉ですが、とてもいい言葉だと思っています。子育てというのは子どもを育てながら親も育っていく、つまり保育園とか周りのみんなに育てられて、自分も子どもの成長をみながら育っていくというのだと思っています。何もかも完璧に一人でやるというのは無理で、子どもには子どもの育ち方と個性があることを尊重して、人の力も借りながらおおらかに子育ても楽しみ、子どもに恥ずかしくないよう自分も成長していく。つまり自分の子育て観も変えていく必要があるのかなと思っています。



京都府立医科大学 病児保育室開室1周年記念フォーラム アンケート抜粋

- 約10年間大学病院に勤務してきたが、今回のようなフォーラムが開かれやっと本院でも育児をしながら働く職員のことが考えられるようになったのかなと思う。子育て世代が働けない職場は将来的に大きな損失になると思います。
- 普段利用している病児保育の運営や課題などについて、わかりやすく報告して頂き、理解が深まった。
- 「こがも」の現状を知ることができ、病児保育の必要性を改めて感じた。「こがも」は、室の構造やWEB予約システムなど考えて作られている良い施設だと思いました。
- 「こがも」の活動は素晴らしい。京都府と医大の時代を変える取り組みです。がんばってください。
- 「こがも」の存在は精神的に心強い。病気の時も安心してお願いすることができています。是非、継続をお願いします。

京都府立医科大学 病児保育室「こがも」開室1周年報告 三沢 あき子 京都府立医科大学 小児科学教室 講師

病児保育室開室

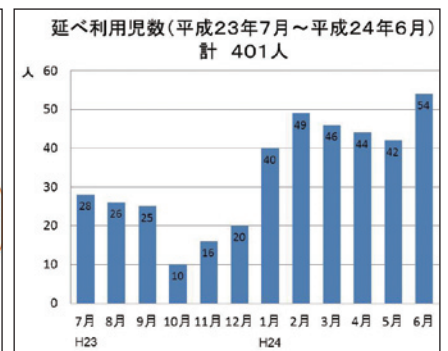
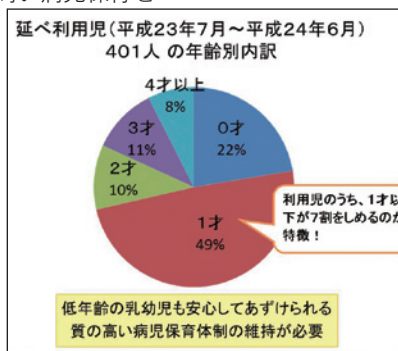
平成22年に文部科学省科学技術振興調整費女性研究者支援モデル育成事業に「しなやか女性医学研究者支援みやこモデル」が採択され、平成23年7月本モデルの一つの柱である病児保育室「こがも」が学内（学生部棟3階）に開室し、1周年を迎えました。平成21年に行った全学的アンケート調査の結果、最も要望の高かった支援体制が病児保育室の設置でした。子どもの発熱等は急でスケジュールをたてられるものでもなく、他の職種と比較して圧倒的に代理がききにくい医療者にとって、キャリア形成期と重なりやすい子育て期において大きなハードルとなっている現状があります。医療者においては、子どもを安心してあずけることのできる病児保育が求められていました。

「こがも」の工夫

- ①子どもにとって親にとっても、病時に知らない所・知らない人にあずけられるのは大きなストレスとなることを配慮し、「こがも」とそのスタッフに日頃から慣れ親しんでもらえるよう、七夕会やクリスマス会などのイベントを開催し、多くの親子が参加してくれています。
- ②陰圧換気の入った隔離室も活用し、子ども達の間で室内感染がおこらないよう感染症管理対策を徹底する質の高い病児保育を心がけております。
- ③安心して使いやすいように、web予約システムを導入し、年度当初に利用説明会を開催しています。

「こがも」利用状況

平成23年7月開室後、この1年間の延べ利用児数は400人にのぼりました。育児休暇を取りにくい医療職を反映して、利用児のうち1才以下の乳幼児が7割をしめています（0才児；22%、1才児；49%）。今後も、低年齢の乳幼児も安心してあずけられる質の高い病児保育体制の維持が必要とされています。



パネルディスカッション「医療者とその子ども達にとっての病児保育」

それぞれのお立場からご家族のご紹介も交え、共感でき、前向きになれるお話に会場は聞き入りました。託児も有り時間が短く会場の皆さんからのご意見もお聞きできたら更に良かったのと思われる1時間でした。パネリストの方々のお話の概要をご紹介します。

〇行政の女性医師対策について

—横田昇平氏（京都府健康福祉部医療専門監）—

厚生労働省の女性医師支援事業から、都道府県への委託事業として①女性医師等就労支援事業、日本医師会への委託事業としての②女性医師支援センター事業、③病院内保育所事業をご紹介いただきました。府で取り組まれている①と③の女性医師復帰支援事業と院内保育事業運営補助事業の実施内容を紹介いただきました。更に京都府でも昨年6月に京都府地域医療支援センター（KMCC）を立ち上げ、①オール京都体制で医師のキャリア形成の支援による医師の増加、②女性医師のワーキンググループを設置し、就労環境や再就業支援などの課題を抽出した女性医師支援施策の提言を行う予定であるなどご自身の留学されたドイツとの比較を交えながらお話いただきました。

〇病児保育から考える子育て支援

—上野たまき氏（綾部市立病院小児科部長）—

綾部市立病院に赴任された当時は院内保育所がなく苦勞されたこと、その後他の医師の出産を機に病児保育室と通常保育室が開設されることになり、医師、看護師だけでなく、技師や薬剤師、事務職員の利用もあり日々調整に工夫していること、看護師の離職率の低下や女性医師の復職、警報発令時の欠勤者の減少という効果につながっていること、運営上の問題点や今後の課題がありながら、子育て支援を通じ、仕事へのモチベーションをあげ、この仕事を選んだ責任感をもって、家族への愛情、他者への気遣いの気持ちがあればなんとか仕事を続けていけるのではないかとお話をいただきました。

今後の課題

平成24年1月に実施した登録者へのアンケート調査では、病児保育の内容に問題がないという回答が100%、また、今後も病児保育の継続を希望するという回答が100%でした。子ども達への保育・看護はもちろんのこと、子どもが病時にも仕事を休めない親のつらい心情も配慮できるスタッフのきめ細やかな対応も「こがも」支持の高さの理由の一つと思われます。現在の事前診察制から回診制への変更の要望や開室時間帯の延長の要望も今後の検討課題です。また、本当に子どもがしんどい時は、親が休むことのできる体制の整備や理解の普及に関する啓発も大切な課題です。今後も、医療者である親とその子ども達を支える病児保育室を軸とした子育て支援を展開していきたいと考えております。

病児保育室は、京都府の医育機関を担う本学において、公費が投入され初期教育の基盤のできた貴重な人材である若手医師及び看護師等が、子育て期に離職することなくキャリアを継続でき、次世代を担う医療者としての使命を全うしていくことが可能となる重要な施策であります。来年度以降、モデル事業終了後の継続運営という大切な課題に関して議論をしていただければ幸いです。

〇病児保育室の位置づけ

—福本暁子氏（京都府立医科大学眼科学教室 大学院生）—

「こがも」利用第一位という利用者の立場から、ユニークなご家族のご紹介に始まり、医療者という立場上、当日急に休んだり代わりを頼むのは難しいため、「こがも」ができるまでは遠くの実家の母親と民間の病児保育に頼ってきたが、子どもが2人になると病気の頻度も増え、肉体的負担は何かなくなるが、精神的負担はかならずと、「こがも」に子どもが喜んで行ってくれるので、その時間は割り切って有効に使おうと仕事にも前向きになってきたこと、「こがも」の利用のしやすさや保育の様子を他と比較しながらお話され、今後のこがも存在は、間接的に将来の人材確保や科を越えた交流につながり、大きな観点から大学と病院全体にとってのメリットとなり、是非存続をしてほしいと熱く語っていただきました。

〇病児保育「こがも」を利用して

—藤井あゆみ氏（京都府立医科大学附属病院 看護師）—

ご自身の職場復帰の経験を通じ、ベビーシッターの登録などあらゆる準備をしたが、1歳までは病気の連続でとても苦勞をされたこと、子どものしんどい時に預けてまで働く必要はあるのかなど様々な思いの中、「こがも」を利用することにより子どものみならず母親の精神的支えにもなり助けられたこと、感染症への対応やスタッフの愛情深さなど「こがも」の良いところをあげ、看護師さんとして保育時間の検討や事前診察の検討を課題としてお話をいただきました。



●こがも「七夕会」

平成24年7月7日（生後4か月～7歳の児童36名が参加）

病児保育開室1周年記念フォーラムと同時に、病児保育室「こがも」では「七夕会」を開催しました。生後4か月～7歳のお子さん36名が参加してくれました。七夕かざり・工作遊び・音楽会・紙芝居と子ども達と供に、楽しいひとときを過ごしました。



平成24年度研修医・学生のためのイブニングセミナー「キャリアデザインにおける専門医取得について」 6月21日（木）午後6時～7時

○「女性研究者支援の取組」

矢部 千尋 京都府立医科大学男女共同参画推進センター長・薬理学教室 教授
本センターの4つの柱の基本的な事業を紹介します。1つ目は広報啓発活動で、講演会、シンポジウムの開催やニュースレターの発行、ホームページでの広報などを行っています。また、相談窓口も開設しています。2つ目は在宅支援でテレビ会議システムや在宅でのオンライン文献検索システムなど、3つ目は病児保育室の開室です。4つ目は本センターの最終目標でもある男女共のワークライフバランスの推進で、フューチャーステップ研究員制度の導入や研究支援員雇用事業で、モデル事業のほぼ8割程度の目標を達成しました。補助事業が終わる来年度以降どのように継続していくかが課題となっています。

○「専門医維持を如何にしていくか ～眼科の事例から～」

外園 千恵 京都府立医科大学眼科学教室 講師
医師国家試験に合格した者は自由に標榜科目を選べるが、日本専門医制評価・認定機構では5年以上の専門研修を受け資格審査並びに専門医試験に合格して、学会等で認定された医師を専門医と定義しています。基本領域18学会が定められており、さらに20のサブスペシャリティ学会があります。内科、外科はサブスペシャリティの専門医をとることが多く、眼科、耳鼻科、皮膚科等では専門医の種類はひとつとなります。

専門医試験の合格率は、一番高い放射線科で約9割、眼科は低く6割ぐらいで、他科は7割～8割台です。専門医試験を受験するための条件が学会毎に定められているので、早い時期に取得したい専門医の受験条件をしっかりと確認する必要があります。

専門医を取得できてもそれで終わりではなく5年毎に更新をしなければなりません。更新できない場合、一度専門医を手放すと合格するのは難しいので、眼科学会では休止制度を設けています。休止の理由として、留学、介護等もありますが、ほとんどの休止理由は育児であり、専門医の維持と子育てとの両立は難しい課題といえます。両立のためには、本センターの事業でもある病児保育室や時短勤務制度を利用したり、ロールモデルを持つなど専門医を取得した後も一定のレベルを維持するために努力をしていくという意識を是非持ってください。

●表彰を受けました。

平成24年6月19日（火）、平成24年度京都府公立大学法人教職員表彰（功績表彰）を受けました。病児保育室設置や短時間勤務制度など、女性医学研究者が家庭生活と医学研究を両立するための環境整備の取組に対し表彰されたものです。

お知らせ

- 女性研究者支援員雇用事業に本年も11人が選考されました。
- フューチャー・ステップ研究員（非常勤短時間勤務制度）が3名選考され、始動しています。
- 「女性医学研究者等支援相談窓口」開設しています。

キャリア形成の支援及び研究とライフイベントとの両立などのご相談を受け付けています。是非ご活用ください。



編集後記

病児保育開室1周年記念フォーラムは、おかげさまで、学内・学外から約100名におよぶ大勢の方々にご参加いただき盛況に終えることができました。誠にありがとうございました。今後も、医療者である利用者とその子ども達に慕われる病児保育室でありたいと願っておりますので、ご支援・ご協力のほど何卒よろしくお願い申し上げます。（三沢）

男女共同参画推進センター

〒602-8566 京都市上京区河原町通広小路上ル梶井町465
電話（FAX）：075-251-5165
Eメール：miyako@koto.kpu-m.ac.jp
URL：http://www.f.kpu-m.ac.jp/j/miyakomodel